

生きることと信仰Ⅱ

—内村鑑三の回心とロマ書—

野中寛治（倫理文化研究センター研究員）

はじめに

内村鑑三は、明治18年2月18日の日記に、「懷疑になやみ、少なからず苦しむ。わが心はしっかりと神にすえられねばならぬ。人の意見は多様だ。しかし神の真理（まこと）は一つのはずだ。神ご自身に教えられぬかぎり、真の知識を得ることはできない」と記している。

また、内村は、大正10年1月から翌年10月にかけて、60回に及ぶロマ書（新約聖書のパウロの「ローマの信徒への手紙」）の講演会を行っているが、その中では、「キリスト教というからとて、これを、他のいわゆる宗教と同一列に置くは誤まっている。キリスト教はいわゆる宗教ではない。神より人への啓示である。宗教は人が神を求むるものであるが、キリスト教は神が人を求むるものである」「自己が種々の方法をめぐらして神に近より行くのが普通の宗教であって、ただ恩恵を受け感謝喜悅に入るのがキリスト教である」と述べている。

内村の言わんとするのは、いわゆる普通の宗教は人本位であるが己の信仰は神本位であるということではないだろうか。すなわち内村は、人本位の信仰者ではなく、神本位の信仰者であったと言えるのではないか。では、はたして内村の神本位の信仰とはどのようなものだろうか。

筆者は、本誌24号（2015年8月1日発行）で、「生きることと信仰 —内村鑑三の信仰実践から—」として、内村の信仰を概観したが、本稿では、内村の回心とロマ書への言及を見ながら、神本位の信仰者としての内村鑑三について考えていきたい。